

発達心理学

開講日 ・ 6/22 18:00~21:00 第3回
・ 6/29 18:00~21:00 第4回 終了!

講師：三浦志織

心理学ってなに？

- 人の心がわかる？
- 心理テスト？
- 占い？



ロールシャッハ・テスト



心理学ってなに？

心理学 = 行動の科学

今回学ぶ教育心理学

<第1章 発達心理学基本概念>

- ・第1節 発達心理学とは何か
- ・第2節 人間の発達に関する理論

<第2章 幼児期・新生児期・乳児期>

- ・第3節 新生児期・乳児期

<第3章 幼児期前期>

- ・第2節 自我の芽生えとイヤイヤ期

設問（2）レポート課題

- ・発達心理学とは何かを、「発達」および「心理学」という言葉の意味を明らかにして、説明してください。特に、「発達」という言葉の意味を説明する際は、生涯発達の側面に必ず触れてください。続いて、発達心理学の一例として、幼児期前期における自我の発達について詳細に説明してください。最後に、あなたが説明した発達過程を知ることが、保育者としてどのように役立つか述べてください。

設問（2）レポート課題 レポート作成手順

- ①「心理学」を説明（他の参考書などを参考に）
- ②「発達」を説明（テキスト抜粋）
- ③「生涯発達」を説明（テキスト参考）
- ④幼児前期における自我の発達について説明（後説明教科書p44～55）
- ⑤上を踏まえて、保育所保育指針（p180～などを参考）

①「心理学」を説明 心理学ってなに？

- ・心理学 = 行動の科学

→心の動きを研究する学問である。心の動きは、自分と自分の周りを認識し、環境への適応をもたらし、その人らしさを形成し、社会や文化を作り上げてきた。それは人が考えたり行動したりというような具体的な動きから成り立っている。

（参照）「青木紀久代・神宮英夫（2005）徹底図解 心理学，新星出版社」

<第1章 発達心理学基本概念>
② 「発達」を説明

「発達 (Development)」

→精子と卵子が受精した瞬間から死亡するまでの身体や心の構造・機能に生じる連続的な変化



- ・出生～死まで
- ・上昇変化だけでなく、下降的な変化

個体の時間に伴う変化

<第1章 発達心理学基本概念>
③ 「生涯発達」を説明



生涯発達とは??
人生初期の成長だけでなく
人生後半の死へ向かって
衰えていく全般的な発達
→ポジティブ, ネガティブ成長
の全てを含む

③ 「生涯発達」を説明

・大人になって出来るようになった

・大人になって出来ないようになった

段階	時期 (年齢)	心理的課題
I	乳児期 (0～1歳頃)	基本的信頼 対 不信感
II	幼児期初期 (1～3歳頃)	自律性 対 恥、疑惑
III	遊戯期 (3～6歳頃)	自主性 対 罪悪感
IV	学童期 (7～11歳頃)	勤勉性 対 劣等感
V	青年期 (12～20歳頃)	同一性 対 役割の混乱
VI	前成人期 (20～30歳頃)	親密性 対 孤立
VII	成人期 (30～65歳頃)	生殖性、世代性 対 停滞
VIII	老年期 (65歳頃～)	統合 対 絶望、嫌悪

<第I章 発達心理学基本概念>
 発達の順序性



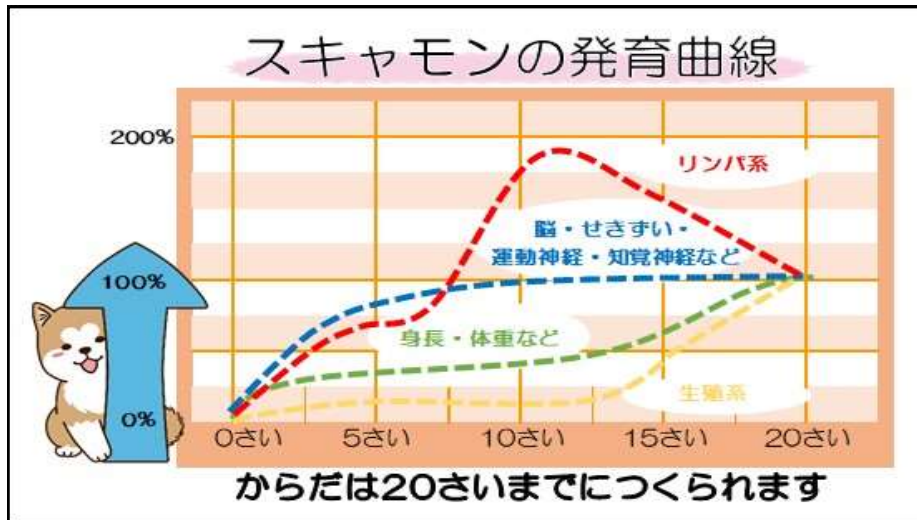
設問 (1) 試験問題 番号 1

(1) 発達の異速性 (発達は異なる速度で進むこと) を示す代表例を一つ述べ、その例について簡潔に説明してください。

<第I章 発達心理学基本概念>
 発達の異速性

- 発達の異速性とは
 発達が起きる部位によって、伸びる時期をしばらく止まっている時期とが繰り返されること。
 例, 身体発達
 「充実期」・・・主に筋肉や脂肪などの身体の組織の発達
 「伸長期」・・・骨の発達
 } 二つの成長が交互に訪れる

➡ 成長期の無理な減量で正常な身体発達, 性成熟を妨げる



設問 (1) レポート課題

- 「愛着」について、動物行動学研究を踏まえながら説明してください。次に愛着行動について具体例をあげながら3種類説明してください。最後に、愛着の形成によって生じる「安全基地」という概念について背説明し、「安全基地」の存在が子供に及ぼす影響について説明してください。

<第I章 発達心理学基本概念> 発達の敏感期

- 発達の敏感期とは

発達に何らかの経験が必要な場合、その効果をもっとも有効な一定期間があり、それ以前でもそれ行こうでも経験の効果が著しく失われること。

- ①「臨界期」・・・限定的な時期にしか獲得されず、その時期を逃すと一生その機能を発達させることが出来ない
- ②「敏感期」・・・経験の効果が著しい時期

発達の敏感期 「臨界期」

- 刻印付け (インプリンティング) とは

鳥の雛は卵から孵化して最初に目にしたものに対して、追尾するなどの愛着行動を示すことを動物の行動学者ローレンツが提唱した。



発達の敏感期 「臨界期」

- 刻印付け（インプリンティング）の理解で重要な視点

→対象希求性は栄養摂取の欲求からくるものではない！
（餌をくれないような、生理的要求を充足してくれない場合であっても、特定の対象を後追いする）

発達の敏感期 「敏感期」

- 敏感期とは

一定の時期に経験できなければ一生発達しないわけではなく、経験の効果が著しい時期（人間の発達には柔軟なため一般的にはこちらを指す）

発達の敏感期 「敏感期」

- ハーロウの代理母実験

「ミルクをくれない布で作った母親」と「ミルクをくれる針金で作った母親」を置くと、お腹が空いた時にのみ針金の母親へ近づき、それ以外は「ミルクをくれない布で作った母親」にしがみついで過ごし、そこを活動の拠点とする。

→食欲ではなく、やわらかな感触が
安心感を与えてくれる対象と認識



<第2章 胎児期・新生児期・乳児期> 愛着の発達 (PP34)



ジョン・ボウルビー (1907-1990)
イギリスの児童精神科医。乳児院、孤児院に收容された子供たちの発達の遅れ、死亡率や適応不良が多く見られたことから調査に加わり、後に母子関係の重要性を理論づけた人物。
「愛着(attachment)」の概念を提唱。

<第2章 胎児期・新生児期・乳児期> 愛着の発達

- ・施設病（ホスピタリズム）とは

乳児期に何らかの事情により、長期にわたって親から離され施設に入所した場合に
でてくる情緒的な障害や身体的な発育の遅れ

<症状>

- ・身体的発達の遅滞 ・環境に適応する能力の遅滞 ・言葉の遅滞

- ・病気に対する抵抗力の低下

→重症の場合は死に至るが、深刻な症状は情緒の欠如

<第2章 胎児期・新生児期・乳児期> 愛着の発達

- ・愛着（アタッチメント）とは

特定個体との接近を求め、またそれを維持しようとする傾向、あるいはその結果確
立される情緒的絆そのもの

→親と子ども間の無条件の信頼関係

<第2章 胎児期・新生児期・乳児期> 愛着の発達



<第2章 胎児期・新生児期・乳児期> 愛着の発達

- ・愛着の三つの種類

「定位行動」・・・母親の所在を知ろうとする行動

「信号行動」・・・母親の関心を得ようとする行動（母親を呼ぶ行動）

「接近行動」・・・母親の方へ近づく行動

<第2章 胎児期・新生児期・乳児期>
愛着の発達

図表2-1 アタッチメントの行動の種類 P10

行 動	具体例
定 位 行 動	注視する、追視する、声を聞く
発 信 行 動	泣く、ほほえむ、発声する
接 近 行 動	後を追う、まとわりつく、抱きつく



<第2章 胎児期・新生児期・乳児期>
愛着の発達

愛着行動の他者との接近関係を維持するとは、文字通り

距離的に近くに居続けることだけでなく、特定対象との間に信頼関係を築き
何かあった時はその対象から助けってもらえるという見込みや確信を
絶えずに抱いていられるようになっていく。



<第2章 胎児期・新生児期・乳児期>
愛着の発達

愛着の発達 (藤生, 1991)

第1段階：前愛着(誕生～生後8-12週)

第2段階：愛着形成(～生後3～6か月)



全ての人に対して視線を向けたり手を伸ばす



身近な人にもみ頼しみを表す 人見知り

第3段階：明確な愛着(～2,3歳)

第4段階：目標修正的協働関係(2,3歳～)



養育者を環境探索の基地とする
養育者が離れると嫌という意志表示



養育者の目標・感情・視点の理解

<第2章 胎児期・新生児期・乳児期>
愛着の発達

・内的作業モデル (internal working model)

他者との関係のあり方として機能するモデルのこと。他者に対して抱いている根本的な考え方を指す。

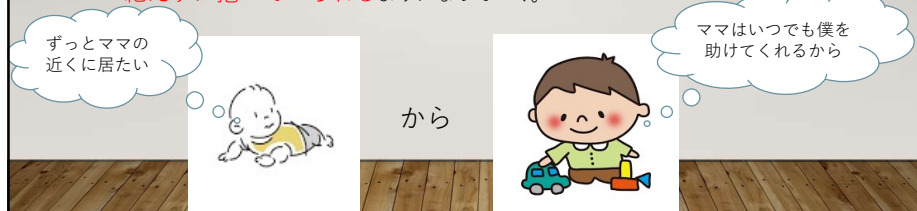
「自分は愛される価値ある存在か」=自己についてのモデル

「他者は自分を助けてくれるか、信頼できるか」=他者についてのモデル

<第2章 胎児期・新生児期・乳児期> 愛着の発達

愛着行動の他者との接近関係を維持するとは、文字通り

距離的に近くに居続けることだけでなく、特定対象との間に信頼関係を築き
何かあった時はその対象から助けてもらえるという見込みや確信を
絶えずに抱いていられるようになっていく。



<第2章 胎児期・新生児期・乳児期> 愛着の発達

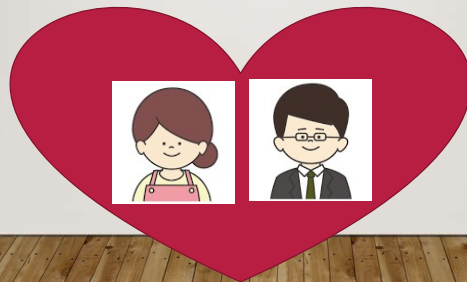
愛着行動の発達とは??



<第2章 胎児期・新生児期・乳児期> 愛着の発達

・ 表象とは？

→心の中のイメージ、心の中の表現



設問（1）レポート課題 レポート作成手順

- ・ 「愛着」について、動物行動学研究を踏まえながら説明
→ローレンツ、ハーロウの研究を説明
- ・ 「ヒト」の愛着理論を提唱した人物と「愛着」の定義を説明
→ボウルビーの愛着を説明
- ・ 愛着行動の具体例を3つあげる
→定位行動、信号行動、接近行動について説明し、「行動レベルの接近から表象レベルの接近」への発達を説明。
- ・ 「安全基地」の概念について説明
- ・ 「安全基地」を踏まえて、子供に及ぼす影響をあげる
→テキストの内容と「安全基地」を踏まえ保育をする上で、例を想定してみるなど

<第2章 胎児期・新生児期・乳児期> 愛着の発達

• 安全基地 (Secure Base)

愛着対象が、子どもにとって心地よい安定を提供する役割、そして保護が保証された環境を意味する。子どもは親を安全基地とすることで、安心して周囲の世界を自由に探索出来るようになる。(探索行動)

→母と子の間には見えない円線があり、それ以上は超えず不安を覚えて、子どもは母親に引き寄せられると考えられている (Anderson, J 1972)

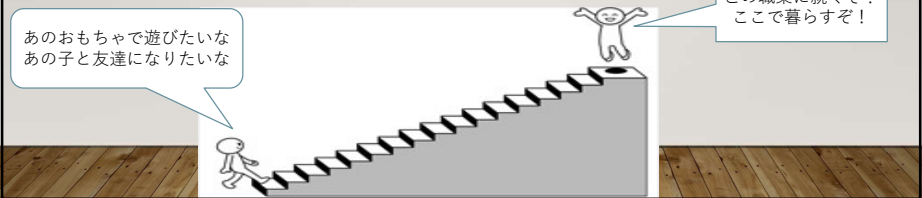


<第2章 胎児期・新生児期・乳児期> 愛着の発達

• 探索行動

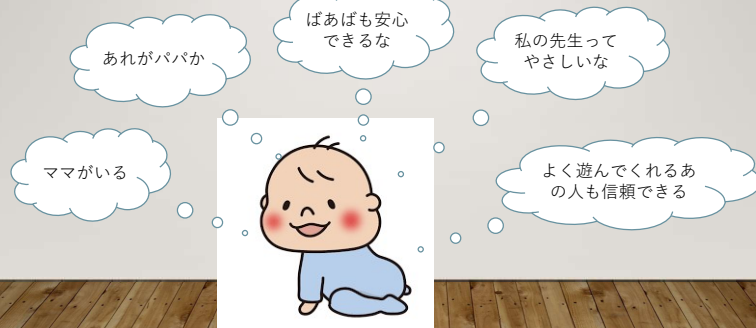
養育者が居続ける安全基地を確保した子どもは、養育者のそばから離れておもちゃで遊び、何かを学び、身の回りを探索し、好奇心をもち、他の子どもとふれあい、小さな挑戦を初めていく。

→それがやがて大きな決断や人生を決める重要な選択につながる



<第2章 胎児期・新生児期・乳児期> 愛着の発達

• 安全基地 (Secure Base)



<第2章 胎児期・新生児期・乳児期> 愛着の発達

• 以上を踏まえて保育者が子供に対しできることは？事例を用いながら考えてみよう

→信頼できる関係づくり (ex.四月入園の子供たち、不安がいっぱいです。泣いている子どもに対しなんて声をかける？)

→保育者が安全基地になることで子供の探索、外界への興味を広げる

→子供の興味、活動を広げる起爆剤に

→不適切な養育関係から適切な関係に

→「安全基地」を理解し、子供の不安に寄り添う

<第2章 胎児期・新生児期・乳児期> 愛着の発達

- ・ 以上を踏まえて保育者が子供に対してできることは？事例を用いながら考えてみよう
- 信頼できる関係づくり
- 「大丈夫だよ」「不安だよ」「初めまして、(自己紹介)」
- 保育者が安全基地になることで子供の探索、外界への興味を広げる
- 不安なことがあった時は、抱きしめ、「(「びっくりしたね」「大丈夫だからね)」興味を湧くような声かけを(「あれはなんだろう」「一緒にやってみよう」)
- 子供の興味、活動を広げる起爆剤に
- 子どもの月齢、年齢に合わせて活動や遊びを用意する
- 不適切な養育関係から適切な関係に
- 継続して、安心した信頼関係が気づけるよう配慮する。クラスが変化する際に、園全体で情報共有
- 「安全基地」を理解し、子供の不安に寄り添う
- 上記参照

設問(1) 試験問題

(2) 誕生から三ヶ月ごろまでの情緒の発達について、「微笑」の変化に注目して簡潔に説明してください。

<第2章 胎児期・新生児期・乳児期> 運動の発達



図2-9 二足歩行までの発達の变化
(出典：白佐俊憲(1982) 保育・教育のための心理学図説資料 川島書店)

<第2章 胎児期・新生児期・乳児期> 運動の発達

小児発達過程の語呂合わせ

- ・ **しっかりと**首座る 4ヶ月
- ・ **ごろーん**と寝返り 5~6ヶ月
- ・ **悩ん**でおすわり 7~8ヶ月 (手を支えてあげると、安定してお座り)
- ・ **とーとー**おすわり 10ヶ月 (自分でお座り)
- ・ **いいなー**、たっち 11ヶ月 (つかまり立ち)
- ・ **1歳**になったらあんよ 12ヶ月 (歩き始める)

<第2章 胎児期・新生児期・乳児期>
言葉の発達

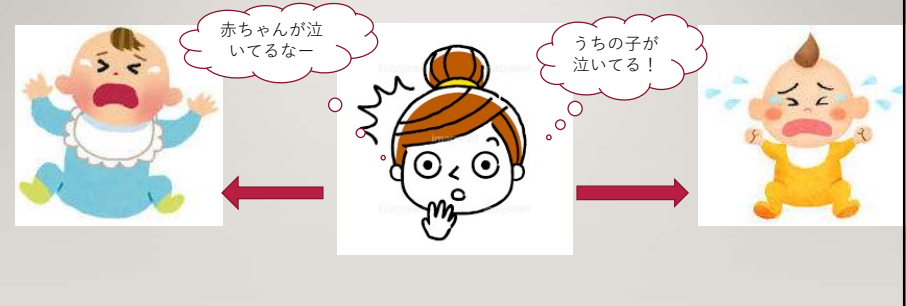
表2-1 生後1年間の発声の発達段階

月齢	段階名	特徴
0~1	発声期	口をあまり開かず、声道の共鳴が十分でない母音的な発声を行なう。
2~3	クーイング期	母音的な音と子音的な音を両方含むが、まだ制御された音節とはなりえていない rooing や cooing と呼ばれる発声を行なう。
4~6	拡張期	音節の前身階である不十分な喃語が生じる。さまざまな発声のタイプを試すような声遊びが見られる。
7~10	標準喃語期	完全な音節が発音され、"mamama" や "bababa" のような同音の繰り返しである標準喃語が生じる。
11~12	非重複性の喃語期	異なる子音、母音要素を含み、意味不明のことばに聞こえる一連の発声を行なう。

(出典：藤村直之編著(2009) 発達心理学 ミネルヴァ書房；Oller (1980) をもとに作成)

8~12ヶ月では、明らかに何らかのコミュニケーション

<第2章 胎児期・新生児期・乳児期>
情緒の発達



<第2章 胎児期・新生児期・乳児期>
情緒の発達

- 自発的微笑 (新生児微笑)・・・生後まもなく

相手の表情など外部からの刺激に関係なく微笑む、顔の筋肉の運動。あくまでも反射的なものであると考えられている。



<第2章 胎児期・新生児期・乳児期>
情緒の発達

- 外発的微笑・・・生後2ヶ月ごろ

視覚や聴覚、触覚といった外部の刺激に反応して微笑む。
(ex.沐浴や口角への刺激など)



<第2章 胎児期・新生児期・乳児期> 情緒の発達

- 社会的微笑（3ヶ月微笑）・・・3ヶ月ごろ

スピッツ（Spitz,R.A.）が観察により、提唱した概念。誰かがあやしたり、人の顔に反応して微笑むようになる。特に正面を向いた顔に反応し、目に注目していると言われている。赤ちゃん自身が、自分の示した微笑みが相手の反応を引き出すことを学習し、よりコミュニケーションを取っていく。ただし微笑むという行動は無差別（誰でも、どんな人にも）におこる反応。

→生後5ヶ月を過ぎると、特定の人物に対して微笑む回数が増してくる、逆に親しくない人にはあまり微笑まなくなったりと反応が変化する時期。

<第2章 胎児期・新生児期・乳児期> 情緒の発達

- 8ヶ月不安・・・8ヶ月ごろ

スピッツ（Spitz,R.A.）が提唱。これまで不特定の相手に反応していた赤ちゃんもだんだんと愛着がある人に対して、微笑むようになってくる。いつもお世話をしてくれる人（母親、保育者を含む）や、家族、兄弟を理解し、あまり身近でない人には微笑みを見せなくなっていく。

→養育者を特別な存在として認識し始めた証拠

設問（1）試験問題

（2）誕生から三ヶ月ごろまでの情緒の発達について、「微笑」の変化に注目して簡潔に説明してください。

→生後すぐにおこる**自発的微笑（新生児微笑）**，2ヶ月ごろにおこる**外発的微笑**，3ヶ月ごろから始まる**社会的微笑**，徐々に親しい人を認識してくる移行時期があり、生後8ヶ月になると見知らぬ人には微笑まなくなる人見知りが始まり、この人見知り現象を**8ヶ月不安**と呼ぶ。

設問（2）レポート課題 レポート作成手順

- ①「心理学」を説明（他の参考書などを参考に）
- ②「発達」を説明（テキスト抜粋）
- ③「生涯発達」を説明（テキスト参考）
- ④幼児前期における自我の発達について説明（後説明教科書p44～55）
- ⑤上を踏まえて、保育所保育指針（p180～などを参考）

<第3章 幼児期前期>
自我の芽生えとイヤイヤ期



<第3章 幼児期前期>
自我の芽生えとイヤイヤ期



イヤイヤ期の特徴

- ・「自分で」という感覚が「自我の芽生え」
- ・なんでも「自分で」やりたがる
- ・自分と養育者は別という認識をもつ
- ・自立の第一段階（第一次反抗期）

<第3章 幼児期前期>
自我の芽生えとイヤイヤ期



<第3章 幼児期前期>
自我の芽生えとイヤイヤ期



矛盾してて
気持ち悪い!!

<第3章 幼児期前期>
自我の芽生えとイヤイヤ期



もしかして、自分が泣くと環境
が変わってない？
自分と外界は違うのかも！

→うまれた時から「自分」という意識があるわけではなく、他者の存在を通して、「自分」の存在に気づく

<第3章 幼児期前期>
自我の芽生えとイヤイヤ期



もしかしてこの人が自分の欲求を満たしてくれるんじゃない？



自分の手、足を観察して、自己と他者を区別するよ

<第3章 幼児期前期>
マラー分離固体化理論

正常な自閉期 (0~1ヶ月)	自己と他者の識別がなく、欲求が内部で全面的に満たされる。
正常な共生期 (2~5ヶ月)	内部と外部の識別が生じるが、母親とは全能的な一体感を持つ。
分離個体化期 (5~36ヶ月)	<p>「分化期」5~9ヶ月： 母親を対象として認識し、母親を特定化する。</p> <p>「練習期」9~15ヶ月： 基地としての母親、母親から離れ近きを動き回り探索する。</p> <p>「再接近期」15~24ヶ月： 母親を別の存在として認識し、両価傾向を持つ。</p> <p>「再個体化期」25~36ヶ月： 情緒の対象恒常性が萌芽し、母親表象が統合化され、母親の不在に耐え母親から離れて他の子どもと遊ぶ。</p>

設問(2) レポート課題
レポート作成手順

- ①「心理学」を説明 (他の参考書などを参考に)
- ②「発達」を説明 (テキスト抜粋)
- ③「生涯発達」を説明 (テキスト参考)
- ④幼児前期における自我の発達について説明 (後説明教科書p44~55)
- ⑤上を踏まえて、保育所保育指針 (p180~などを参考)

→レポート1, 2共に、参考文献3つ以上表記を忘れずに！！

設問 (1) 試験問題

(3) ピアジェの認知発達段階における、感覚運動器の特徴について説明してください。少なくとも、感覚運動期の時期、「循環反応」「表象の成立と対象の永続性の関係」について詳しく・具体的に説明してください。

<第I章 発達心理学基本概念> 現代の発達心理学

- ・ピアジェ (1936 Piaget.J.)の認知発達理論

感覚運動期 (0~2歳)

- ・原始的反射を使って外界へと働きかける。
 - ・単純な動作を何回も繰り返す「循環反応」がみられるようになる。
- 「循環反応」と「表象の成立と対象の永続性の関係」

前期操作機 (2~7歳)

- ・自分の立場から見た関係なら理解できるが、他者からの味方を理解できない。思考の基準が子供自身にある
- ・イメージによって思考する時期。無生物にも生命があると思う「アニミズム」という考え方が特徴。
- ・物の保存の概念が不十分。見た目に惑わされて判断し、論理的に考えることが難しい。

参照：小野寺敦子 (2009)手にとるように発達心理学がわかる本, 株式会社かんき出版

<第I章 発達心理学基本概念> 現代の発達心理学

- ・ピアジェ (1936 Piaget.J.)の認知発達理論

具体的操作期 (7~11歳)

- ・保存の概念が成立される。見た目だけでなく理論的に物事を考えられるようになり、複雑な関係も理解できるようになる。
- ・物事をカテゴリーによるひとつのまとまりとして捉えることができるようになる。
(ex.いちご, めろん→「フルーツ」)

形式的操作期 (11歳~成人)

- ・抽象的な概念であっても、仮説を立てて系統的に見ていくことで、物事を論理的に考えられるようになる。
(ex.一次関数 $y=ax+b$ や $\pi=3.14$)

<第I章 発達心理学基本概念> 現代の発達心理学

- ・感覚運動期 (0~2歳)

頭の中での思考ではなく、身体的な対象への関わりが、知的な働きを示す。徐々に頭の中での物事の表象が可能になるが、まだこの段階では外界の物事や行為に運動した思考。

①最初の1ヶ月：反射的活動の段階。

生得的に備わっている原始反射を用い、外界へ関わる。

「原始反射」・・・赤ちゃんがさまざまな刺激によって、無意識に反応する動作。

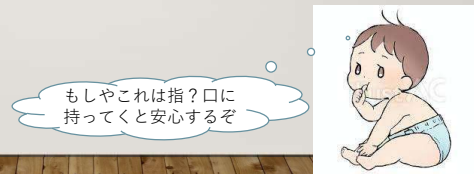
(ex.吸啜反射, 把握反射, パビンスキー反射など)

<第I章 発達心理学基本概念> 現代の発達心理学

- 感覚運動期（0～2歳）

- ② 1～4ヶ月くらい：第一次循環反応の時期

自分の体に焦点をあて、同じ行動を繰り返す（循環させる）。
それが安定した時、「シエマ」と呼ぶ。次第に自分の快になるよう
行動を修正（調節）していく。



<第I章 発達心理学基本概念> 現代の発達心理学

- 感覚運動期（0～2歳）

- ③ 4～8ヶ月くらい：第二次循環期

外的なものに焦点を当てて、同じ行動を繰り返す。自分の体の外にある興味深い出来事を繰り返そうとする。（ガラガラを叩き、音が出るとなんども繰り返すなど）行動はガラガラを掴み、叩き、振るというように、いくつかの組み合わせが可能。



<第I章 発達心理学基本概念> 現代の発達心理学

- 感覚運動期（0～2歳）

- ④ 8～12ヶ月くらい：第二次循環反応の協応の時期

第二次循環反応を組み合わせ、意図的な行動が可能になっていく。目標達成のために簡単な計画を立てる。例えば、叩くシエマとつかむシエマを組み合わせ、ものを叩いて取り除き、隠れているものを取り出すことができる。

「シエマ」・・・行動の単位、行動（叩く、掴む、吸う）のイメージ

<第I章 発達心理学基本概念> 現代の発達心理学

- 感覚運動期（0～2歳）

- ⑤ 12～18ヶ月くらい：第三次循環反応の時期

外界のものについて新たなことを試していく。「実験」する。試行錯誤をしているとき、その様子を見て、学ぶ。例えばものをたまたま落とす。すると今度はわざと落とし、しかもさまざまな落とし方を試みて、どうなるか観察する。外界の対象の変化と自分のその時の行動（シエマの組み合わせ）との関連に気づいていく。

<第I章 発達心理学基本概念> 現代の発達心理学

・ 感覚運動期（0～2歳）

⑥ 18～24ヶ月くらい：心的表象（目の前に存在しないものについても心の中で思い浮かべること）が対象への行為と独立に可能となる。新しい手段を、心の中の思考で手持ちのシエマを組み合わせ作り出す。言葉を意味立てて使う。殴り書きをする。以前みたものをその場とは別の時間、場所で再現する（遅延模倣：おまごなど）

→ 表象の成立は対象の永続性をどれだけ理解しているかによって判断。



設問（1） 試験問題

（3）ピアジェの認知発達段階における、感覚運動器の特徴について説明してください。少なくとも、感覚運動期の時期、「循環反応」「表象の成立と対象の永続性の関係」について詳しく・具体的に説明してください。

→ 最初の1ヶ月、反射的活動の段階。生得的に備わっている原始反射を用い、外界へ関わる。1～4ヶ月くらい、第一次循環反応の時期。自分の体に焦点をあて、同じ行動を繰り返す。これを循環行動と言う。それが安定した時、「シエマ」と呼ぶ。次第に自分の快になるよう行動を修正していく。4～8ヶ月くらい、第二次循環期。外的なものに焦点を当てて、同じ行動を繰り返す。自分の体の外にある興味深い出来事を繰り返そうとする。8～12ヶ月くらい、第二次循環反応の協応の時期。第二次循環反応を組み合わせ、意図的な行動が可能になっていく。目標達成のために簡単な計画を立てる。12～18ヶ月くらい、第三次循環反応の時期。外界のものについて新たなことを試していく。「実験」する。試行錯誤をしていき、その様子を見て、学ぶ。例えばものをたまたま落とす。すると今度はわざと落とし、しかもさまざまな落とし方を試みて、どうなるか観察する。18～24ヶ月くらい、心的表象の成立する。心的対象とは心の中のイメージを指し、目の前に見えなかったとしても、存在するということが理解していることを指す。これを対象の永続性と呼ぶ。（教科書などを参考に具体的に説明）

発達心理学

・ 次回は6月29日（18：00から21：00）

質問や疑問があれば
次回の授業に反映
させていただきます！
遅くまでお疲れ様でした🍀

